

# 小樽観光の展望



「歴史的景観」「ノスタルジックな街並み」といった小樽を形容するこれらの言葉は、小樽観光の長い歴史の中で、運河論争を経験して生まれてきたものと言えます。

## ●観光入込客数の推移

小樽市では、昭和35年から観光入込客数の統計を取っていますが、初年度80万人であった入込客数は昭和40年代に200万人台となり、その後は、ほぼ横ばいで推移しますが、運河埋立後の散策路整備が完成した昭和61年から観光入込客数が右肩上がりに増加し始め、平成11年に973万人のピークを迎えました。

その後、観光入込客数は減少していくますが、市は平成18年に初步なる観光基本計画を策定し、観光入込客数の回復に取り組むとともに、平成20年には『小樽観光都市宣言』を行い、観光振興を市の柱とすることを明示しました。その後も観光入込客数は、東日本大震災が発生した平成23年の604万人まで減少しますが、平成24年からV字回復に転じ、平成30年は780万人まで回復しています。(図1)

## ●外国人観光客の増加

このV字回復には、平成15年に国が始めたビジット・ジャパン・キャンペーンが大きく影響していると考えられます。

国は、当時、500万人であった訪日外国人観光客数を平成22年までの7年間で1千万人に倍増する目標を立て、ビザ緩和など国策として外国人観光客の誘致を進めた結果、平成30年は6倍となる3100万人もの外国人観光客が訪日しています。

平成30年に北海道を訪れた外国人観光客は、過去最多の312万人でした。

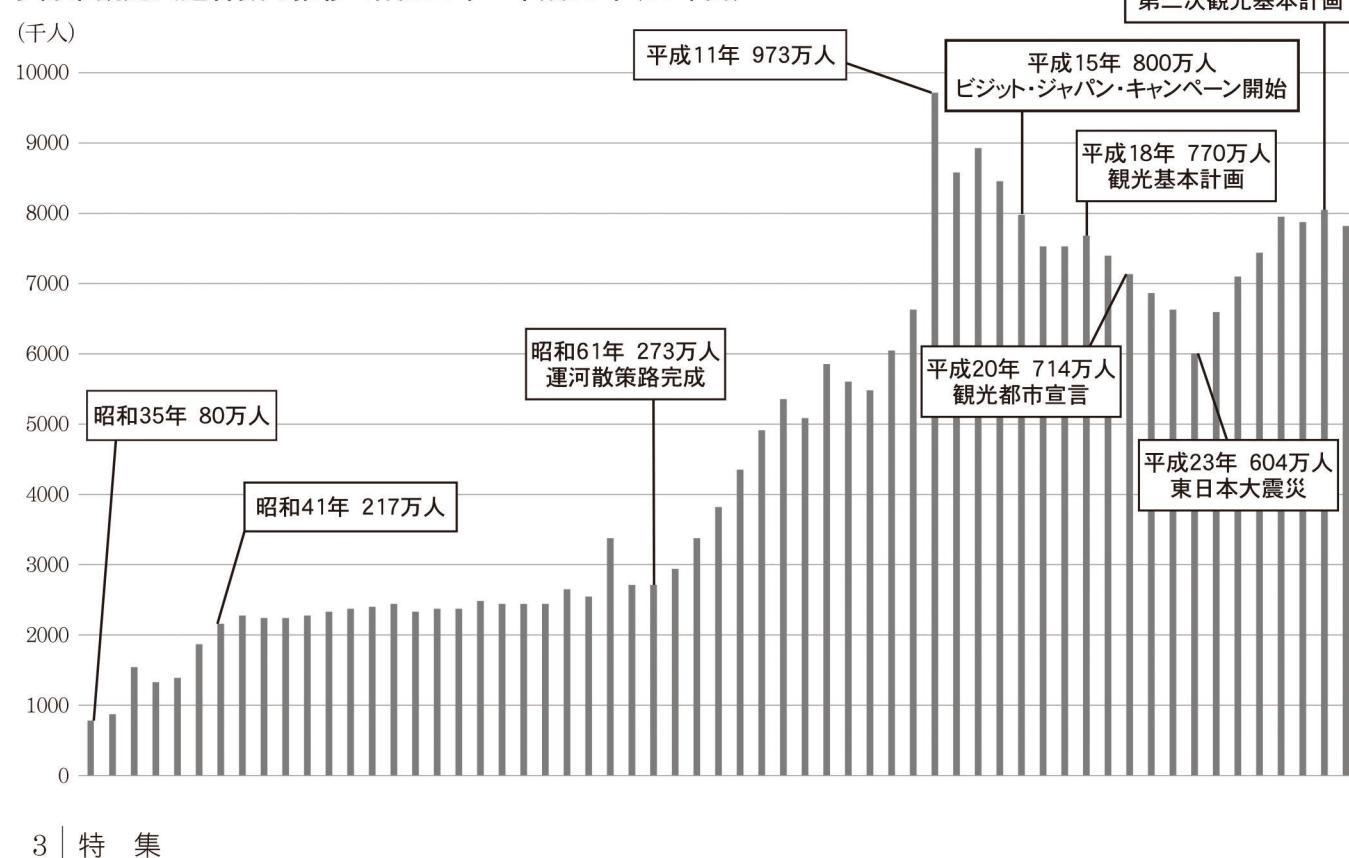
小樽市においても外国人宿泊客数の伸びは著しく、平成15年から平成30年までの15年間で10倍に増えています。

小樽市においても外国人宿泊客数の伸びは著しく、平成15年から平成30年までの15年間で10倍に増えています。

(図1)

図1

小樽市観光入込客数の推移 昭和35年～平成30年(59年間)



昔から花見、紅葉狩りといった行楽は、人々の日常を豊かにしてきました。庶民の旅が制限され別で、一生に一度は実現したい夢であり、人生最大の楽しみと言つても過言ではなかつたようです。あの弥次喜多珍道中もお伊勢参りが舞台になつており、道すがら神社仏閣や名所旧跡を見て歩いています。

旅、つまり観光は、いつの時代も人々の憧れであり、人々の生活から切り離せないものです。

●小樽における観光の歴史

小樽の歴史において、観光につわる出来事で特筆されるのが、蛇の目寿司の主人・加藤秋太郎氏による、オタモイ龍宮閣の建設です。明治41年に愛知県から小樽に移住した秋太郎氏は商売で成功して財産を築きますが、小樽には観光名所が無いと思っていた折に、景勝地オタモイ海岸の話を耳にします。そして個人で本当に観光名所を作つてしましました。昭和9年のことです。

その後、終戦後の国土復興策と

また、手宮の古代文字や市内各所に残る歌碑の類、蒸気機関車しづか号をはじめ明治開拓期の香り漂う鉄道施設などが、名所旧跡として観光パンフレット等で紹介されています。

小樽観光にとつて転機となる出来事が、昭和48年に始まる小樽運河埋め立てを巡る論争です。それまで観光資源として認識されてこなかった石造営業倉庫や社屋として営業中の旧い建物などが観光の対象となることにより、現在の歴史的建造物を柱とする小樽観光に至っています。

して、国が国際観光振興を進める中で、小樽市は、昭和29年に国際観光都市に認定されるとともに、朝里川温泉郷の開発事業を行っています。また、昭和33年の北海道博覧会を契機として水族館が開設されました。

昭和38年には、市や経済界が国へ積極的な働きかけを行い、二セコ積丹小樽海岸国定公園が指定されるなど、昭和36年にA級国設キー場に指定された天狗山や海水浴場などを含め、自然や景勝地を観光資源とする観光整備が行われています。